

1. 構造設計条件

(1) 地震力

標準せん断力係数	$C_o = 0.2$ （一次設計）、 1.0 （二次設計）
重要度係数	$I = 1.25$
地震地域係数	$Z = 0.9$
地下震度	$K = 0.1$

(2) 風圧力

速度圧 $q = 0.6EVo^2$	基準風速 $V_o = 30\text{ m/s}$
地表面粗度区分	Ⅲ
風力係数	告示 平2 建告第1454号 第3による

(3) 積雪荷重

垂直最深積雪量	300
1cm 当りの単位重量	$30.0\text{ N/m}^2\cdot\text{cm}$
長期	$300 \times 30.0 \times 0.7 = 6300\text{ N/m}^2$
短期組合せ	$300 \times 30.0 \times 0.35 = 3150\text{ N/m}^2$

(4) 土圧

土の単位体積重量	kN/m^3	地下水位	設計GL	m
----------	-----------------	------	------	---

(5) 積載荷重 (N/m^2)

部 位	床	小 梁	梁・柱	地 震	部 位	床	小 梁	梁・柱	地 震
太陽光発電	900	900	650	300					
電気室・発電機室	15000	15000	10000	5000					
閉架図書	5900	5900	5400	4900					
閉架図書	11800	11800	10300	7400					
ホール・廊下・階段	3500	3500	3200	2100					
機械室	6000	6000	4300	2500					

(6) 特殊荷重 (kN)

名 称	階	重 量	名 称	階	重 量

2. 使用構造材料

(1) コンクリート

使用箇所	種 類	設計基準強度 $F_c (\text{N/mm}^2)$	所要スランプ (cm)	備 考
基礎・基礎梁	普通	* 30.0	15	
1 Fスラブ	普通	* 30.0	15	
立上りコンクリート	普通	* 30.0	18	
2 F～R Fスラブ	普通	* 30.0	18	
捨てコン	普通	18.0	15	

*印の免注強度は設計基準強度（ F_c ）＋構造体強度補正值（ S ）とする。

(2) コンクリートブロック (CB)

種類	厚さ	使用箇所	備 考

(3) 鉄筋

	種 類	径	使用箇所	継手工法
異形鉄筋	SD295	D10～D16	せん断筋・基礎筋・スラブ壁筋	重ね継手
	SD345	D19～D25	柱梁主筋・基礎筋	ガス圧接継手
	SD390	D29～D32	基礎梁主筋	ガス圧接継手

3. 共通事項

(1) 構造図に記載なき事項は、国土交通省大臣官房官庁営繕部監修・

公共建築工事標準仕様書（令和4年版）「以下標仕」、
建築鉄骨設計基準及び同解説（平成10年版）による。

(2) 鉄筋の断面表示

記号	●	×	◇	●	○	◎	⊗	◎
異形鉄筋	D10	D13	D16	D19	D22	D25	D29	D32

(3) 各階伏図における記号は下表による。

記号	説 明	記号	説 明
○	スラブの配筋種別	◇	スラブ厚さ
□	コンクリートブロック壁 (CB壁)	⊗	スラブ開口
±	FLからの床の上がり下がり	(±)	FLからの梁の上がり下がり

(4) 配筋の種類及び かぶり厚さ

- a：壁、スラブ、階段等の配筋種別は、標仕 各部配筋参考図（4.1）～（6.2）による。
b：鉄筋のかぶり厚さ及び間隔は、標仕 5.3.5による。
c：目地にシーリングがある場合の最小かぶり厚さは標仕（表5.3.6）の「仕上げなし」の項による。

(5) 鉄筋の継手及び定着

鉄筋の継手及び定着は、標仕 5.3.4による。

(6) 骨材、水及び混和材料

骨材、水及び混和材料は、標仕 6.3.3～6.3.5による。

(7) コンクリートの強度試験方法

コンクリートの強度試験方法は、標仕 6.10.4～6.10.6による。

(8) コンクリートの調合

コンクリートの調合は、標仕 6.4.3～6.4.8による。

(9) コンクリートの養生

コンクリートの養生は、標仕 6.7.1～6.7.3による。

(10) コンクリートの型枠の取外し時期

コンクリートの型枠の取外し時期及び方法は、標仕 6.9.5による。

(11) コンクリートの打継ぎ

コンクリートの打継ぎ位置、打継ぎ部の処理法、及び補強筋の有無は監督職員の承諾を得ること。

4. 地業工事

(1) 直接基礎

根切底 設計GL-2.600m
地盤の許容応力度（長期） 300 kN/m^2
平板載荷試験 有・（無）（位置は別途指示）

(2) 杭基礎

工 法 ***

杭径・材料・種別 図面による

杭先端位置 図面による

杭の許容支持力（長期） 図面による

注）杭継手は、無溶接継手方式（認定工法）とする。

杭工事業者：杭工事業者は、工事に相応した技術を有することを証明する資料を、監理者に提出し、承諾を得ること。

施工計画書：杭工事施工計画書を作成し、監理者の承諾を得ること。

採用工法の計算書（支持力の計算書）を提出し、監理者の承諾を得ること。

5. 鉄筋コンクリート工事

(1) 杭基礎

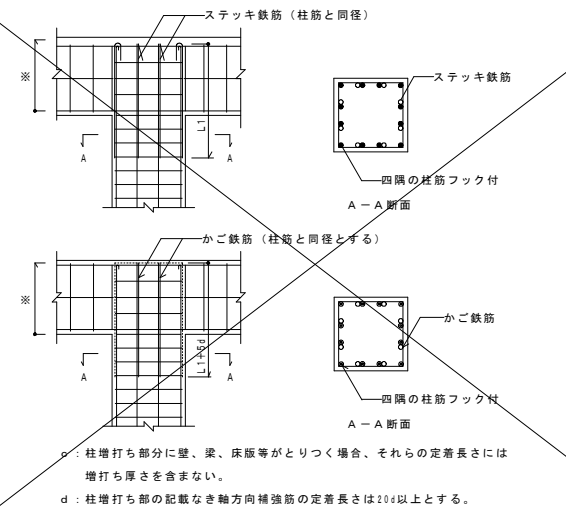
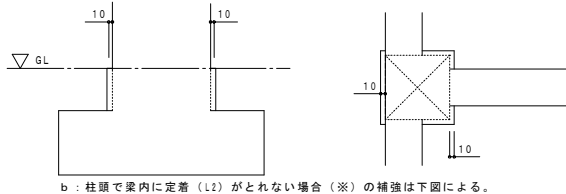
杭の偏心及び高とまりした場合は、監督職員と協議すること。

杭のへりあきは ± 10 以上を確保し、かつ杭頭補強筋の安全性を確認すること。

(2) 柱

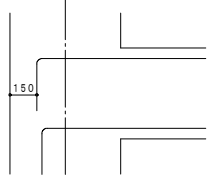
仕口内の H_{oop} は、上下柱の H_{oop} 径以上、且つ、 H_{oop} は上下柱の H_{oop} 径 $\times 1.5$ 以内とする。

a：土に接する柱周囲の増打ちは下図による。

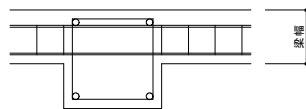


(3) 梁

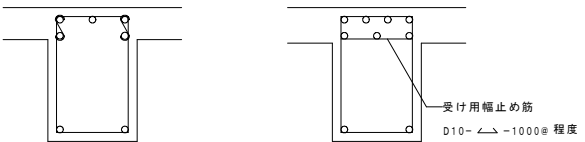
a：大梁主筋の逃げ寸法の標準値は下図による



b：柱面と梁面が同一面の場合、柱主筋径分だけスターラップ幅を狭めて下図のように加工する。



c：梁主筋2段配筋では、2段目の鉄筋も主筋として所定の位置に下図のように正しく配筋する。

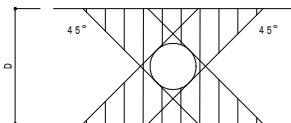


d：梁増打ち部分に床、壁、梁等がとりつく場合、それらの定着長さには増打ち厚さを含まない。

e：梁の増打ちが途中で終わる場合、軸方向補強筋の定着長さはLとする。

f：梁貫通孔の補強に、建設技術評価規定に基づく評価または日本建築センターの評価を受けた製品を監督職員の承諾により使用してもよい。使用にあたってはあらかじめ監督職員と打ち合わせを行うこと。（有孔梁の終局せん断強度が、無孔梁の終局せん断強度以上となる補強とすること。）
孔径が200mmを超える場合、孔の上下にあばら筋と同径・同ピッチの補強筋を入れること。

g：貫通孔の位置は下図のように開孔をはさむ ± 45 度の領域には他の開孔を設けないこと。

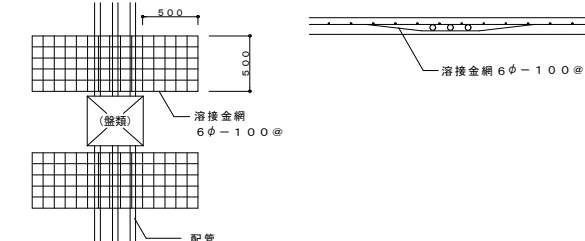


(4) 壁 (RC壁)

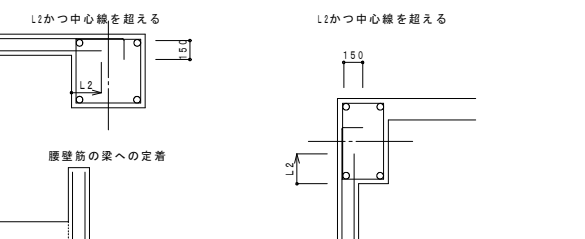
a：EW、EWは耐震壁を示し、配筋はW、Wに同じでかぶり厚さ、継手及び定着長さとは標仕（表5.3.2）、標仕各部配筋参考図（4.2）による。

b：パラペット壁の厚さは140とする。配筋は標仕各部配筋参考図（4.6）による。

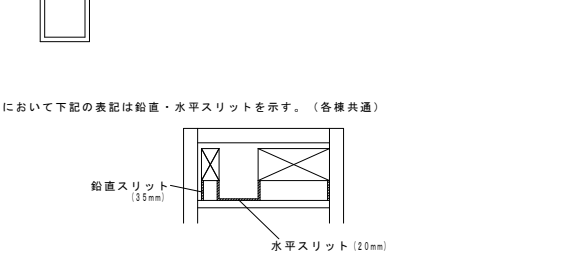
c：1) 開口補強（設備開口を含む）は特記による。特記がなければ、一般壁はB形、耐震壁B形とする。
2) シングル配筋の壁で壁類が埋設される場合は、下記補強を行う。



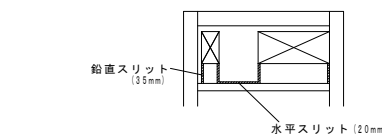
d：壁筋の柱・梁内への定着は下図による。
柱への定着



e：増打ち部分に壁、床版等がとりつく場合、それらの定着長さには増打ち厚さを含まない。

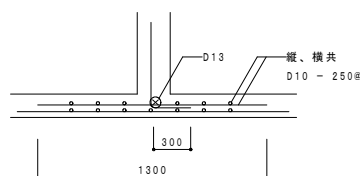


軸組図において下記の表記は鉛直・水平スリットを示す。（各様共通）



(5) 床版

a：1階のRC壁下に基礎小梁がない場合、土間コンクリートに下図の補強を行う。



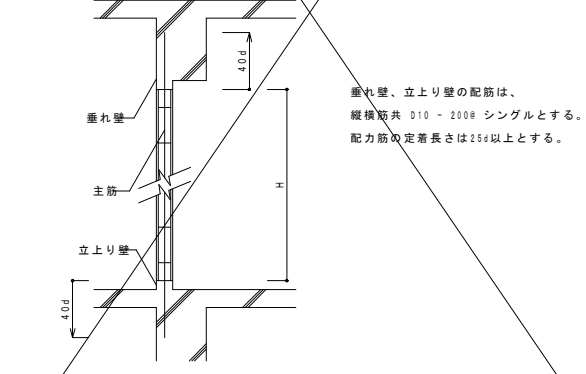
(6) 雑配筋

a：コンクリートブロック 帳壁 (CB)

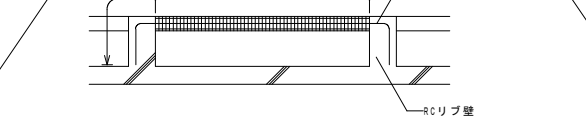
CBの積み高さ(H)又は積み巾(W)は下表の値を最大とし、その上又は下と同じ厚さのRC壁、若しくはその両側にRC控壁を設ける。
なお、RC控壁は標仕 各部配筋参考図（7.3）による。
記載なき限り、下記に示すA型を用いる。

CBの厚さ	100	120	150
H又はWの最大値	2400	3000	3400

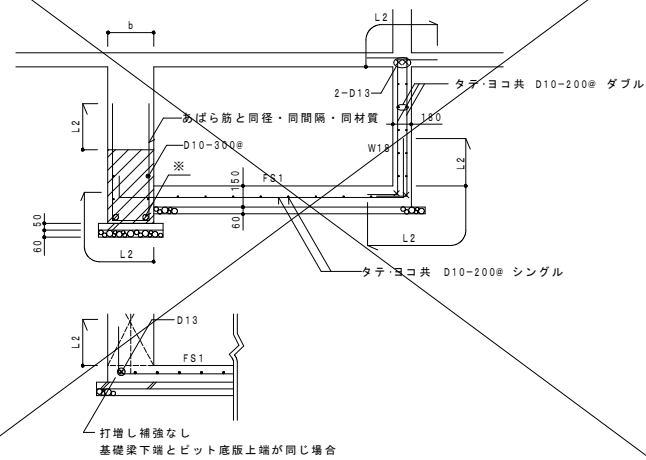
A型



B型



b：特記なきビットの詳細は下記による。
但し※は、 $b \leq 350\text{mm}$ の場合 2-D16、 $b > 350\text{mm}$ の場合 3-D16とする。



かま墙配筋

